

教師を育てるということ

上越教育大学 瀬戸 健

旧友からの突然の電話で、ある地区の小・中学校第三者評価委員を引き受けることになった。4年前のことである。それから2年間、7校の評価に携わった。しかし、これはひどく苦痛を感じるものであった。学校における教育サービスの質は結局は「授業」に収斂すると考えて、かなりの数の授業を見せていただいたのであるが、「こうすれば、もっと簡単に、わかりよい授業になるのに」と思いながら、評価に徹するのにはかなりの忍耐力がいるのである。

この経験から、その後2年間は2つの小学校の協力を得て、教職経験6年までの若手教員16人を対象に、授業力向上をテーマとした校内研修支援を継続してきた。若手教員を選んだのは、成長への意欲が高く初任教員からいわゆる熟達教員への過程が見えやすいと考えたからである。また、教員養成教育や初任者研修で培われた資質・能力と、学校現場が求める資質・能力とギャップが顕在化しやすく、今後の教員養成に関する新たな知見が手に入るとも考えたからである。

支援をするにあたっては、いわゆる研究校といわれる学校で研究主任等を経験してきた教職大学院実務家教員や特任教員に協力を求め、彼らを中核に「実践のプロ」のチームを作った。しかし結果は、まだ成果があがるというところまでには至っていない。

支援の中では様々な課題に直面する。例えば、若手教員は担任する学級が変わると、まるで力が出なくなる。毎年度の初めは、まるで素人のような状態になるのである。それはおそらく、若手教員には学級集団を柔軟に制御しながら「自分の学級をつくる」力がないからであろう。若手教員には、日々子どもたちと取っ組み合いをしながら、結果として出来上がる学級があるだけなのではないか。それが今の若手教員の現実なのである。

先日、支援チームに入ってくださっている元の先輩同僚から手紙をいただいた。

A校の若い先生方の授業を三度参観しました。成長したことがよく分かる人を見ると、素直に嬉しくなりました。反対にそうでない人を見ると、自分の力不足を感じ、悲しい気分になりました。たとえ短い時間の出会いであっても、そうであればなおさら強い影響力を与えられなかったことは、教師として敗北であり、残念でなりません。もっと心に響く話ができるよう自分の財産を増やすこと、機に応じて引き出しの中のを適切にさっと出せるようにすることの必要性を感じています。

共通して思ったことは、「教師が、教材と真正面から向き合い、教材に熱中し、教材に感動する」ことの大切さです。教育はこれがないと、何も始まらないことを改めて強く感じました。

教えることは、斉藤喜博の言葉を借りれば、「傷つく」営みである。教えられる側だけでなく、教える側も「傷つく」。しかし、その痛みをこらえながら、それでも教えることを続けることで少しずつの成長があると考えている。そのような痛みから生まれた実践や研究が、本誌の中で交流されることをいつも期待している。